

# 佐賀市 50 歴史探訪

## む た より い せ き し ゅ つ ど こ だ い い ん 牟田寄遺跡出土の古代印

「はんこ」は現在の日常生活に欠かすことができないものですが、佐賀市兵庫町にある牟田寄遺跡からは平安時代前半ごろ（9世紀～10世紀）に使われていた古代の銅印が出土しました。

日本で発見された最も古いものとしては、福岡県の志賀島で発見された「漢委奴国王」の金印が知られていますが、中国の影響を受け、印の種類や寸法などを規定し、文書などを確実化し有効化させる手段のものとして制度が確立したのは奈良時代になってからのことです。

牟田寄遺跡から出土した銅印は、制度化されて間もないころに使われていたもので、高さ4.3cm、印面3.4cm角、重さ105gの青銅製です。その特徴は、手で摘む部分（ちゅうぶ）が花の萼（つぼみ）のような形で、紐などを通すためと考えられる穴があげられています。また、印面部分の輪郭は二重になっていて、全国的にみても珍しいものです。文字の判読や意味については確定できていませんが、印面が正字としたら、へんとつくりが逆転した「朝」、印影が正字としたら「勝」の篆書体の異体字の可能性があり、人名の一字を表現しているとも考えられています。

このような形の特徴や印面の寸法などから、この銅印は個人が所有していた「私印」と考えられます。古代印は役所跡や寺院跡などから出土することが多いため、所有者は公的施設に関わりをもっていた人物であったのかもしれませんが。

### 一口メモ

佐賀県内での古代印は牟田寄遺跡から出土したものが初例です。九州内をみても希少な出土例であるため、平成13年2月に佐賀市重要文化財に指定されました。現在、佐賀市文化財資料館で見ることができます。



▲古代銅印



▲印面



▲印影

